

- MONTHLY REPORT -

ちゅうぎん日本大型株アクティブファンド  
(愛称:未来のゆめ)

Chugin Asset Management

追加型投信/国内/株式



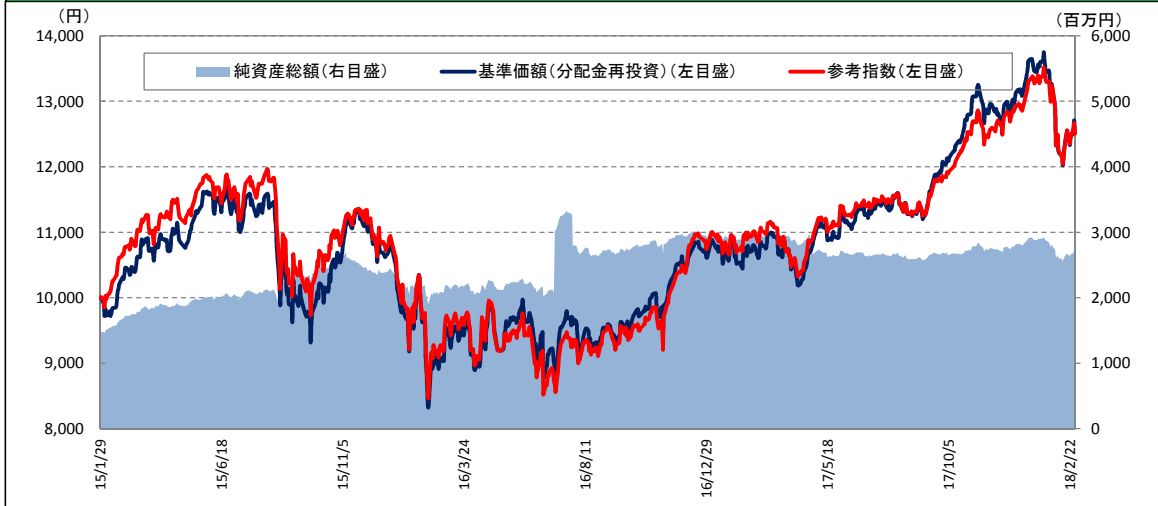
運用実績

設定日・決算日・信託期間	
設定日	2015年1月30日
決算日	1月29日(休業日の場合は翌営業日)
信託期間	2025年1月29日

基準価額・解約価額・純資産総額	
基準価額(分配金控除後)	12,313 円
解約価額	12,277 円
純資産総額	2,679 百万円

※基準価額および解約価額は1万円当たりの価額で表示しております。

基準価額および純資産総額の推移



基準価額の騰落率	1か月	3か月	6か月	1年	設定来
当ファンド	-4.6%	-2.3%	10.1%	17.8%	25.1%
参考指数	-3.7%	-1.3%	9.3%	15.2%	25.1%

資産構成	
株式実質組入	94.3%
現物等	94.3%
先物等	0.0%
コール・ローン、その他	5.7%
組入銘柄数	33

※マザーファンドの状況を比例配分して反映しております。

分配金実績(税引前)					
決算年月	2016年1月	2017年1月	2018年1月	—	—
分配金	0円	50円	150円	—	—

※上記のグラフ、数値等は過去の実績であり、将来の運用成果等を示唆あるいは保証するものではありません。  
 ※基準価額の騰落率およびグラフのデータは、当ファンドの信託報酬(年率1.25%(税抜))控除後の価額を用い、決算時に収益分配があった場合にその分配金を非課税で再投資したものと計算しております。従って実際のファンドにおいては、課税条件によって受益者ごとに指数、騰落率は異なります。また、換金時の費用・税金等は考慮していません。  
 ※参考指数は、TOPIXです。TOPIXに関する著作権等の知的財産権その他一切の権利は、東京証券取引所に帰属します。  
 ※参考指数は、投資対象資産の市場動向を説明する代表的な指数として記載しております。  
 ※グラフの参考指数は設定日の前営業日を10,000として指数化しています。  
 ※分配金実績の分配金は、1万円当たりの実績です。分配金実績は、将来の分配金の水準を示唆あるいは保証するものではありません。  
 ※分配金は、ファンドの純資産から支払われますので、分配金支払いにより純資産が減少することとなり、基準価額が下落する要因となります。  
 ※資産構成は、対純資産総額により算出しております。

株式組入上位10銘柄および組入上位10業種

銘柄名	業種	市場	組入比率
1 日本電産	電気機器	東証一部	7.1%
2 ダイキン工業	機械	東証一部	5.2%
3 ヤマハ発動機	輸送用機器	東証一部	4.5%
4 スズキ	輸送用機器	東証一部	4.3%
5 リクルートホールディングス	サービス業	東証一部	3.8%
6 村田製作所	電気機器	東証一部	3.7%
7 ローム	電気機器	東証一部	3.5%
8 三菱ケミカルホールディングス	化学	東証一部	3.5%
9 TDK	電気機器	東証一部	3.2%
10 シスメックス	電気機器	東証一部	3.2%
合計			41.9%

業種	組入比率
1 電気機器	30.5%
2 輸送用機器	18.6%
3 機械	9.5%
4 化学	9.2%
5 精密機器	5.3%
6 建設業	4.1%
7 サービス業	3.8%
8 その他金融業	2.9%
9 ガラス・土石製品	2.4%
10 卸売業	2.2%
合計	88.5%

※株式組入上位10銘柄および組入上位10業種の各比率は、対純資産総額により算出しております。  
 ※株式組入上位10銘柄および組入上位10業種には、マザーファンドの状況を比例配分して反映しております。

※最終ページの「当資料のご利用にあたっての注意事項等」を必ずご確認ください。

## - MONTHLY REPORT -

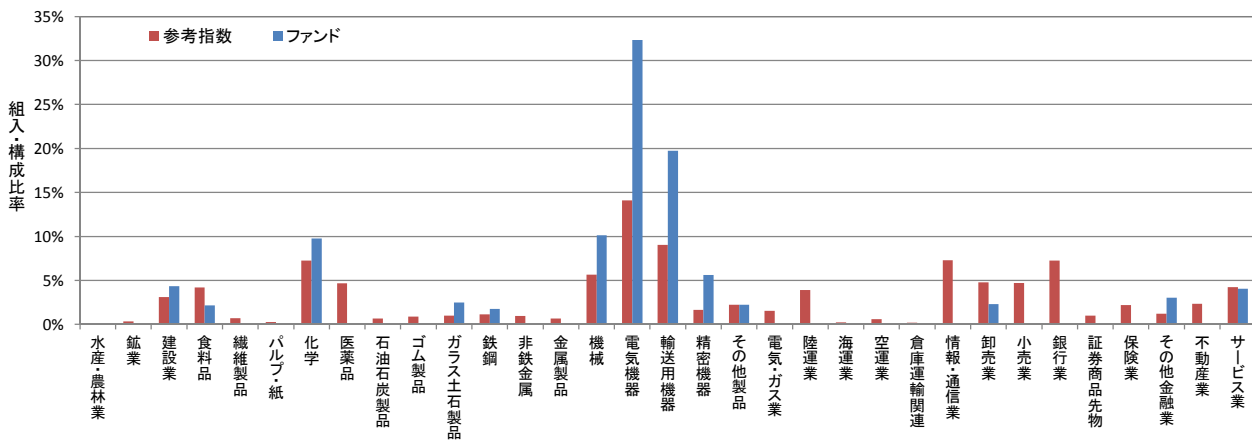
ちゅうぎん日本大型株アクティブファンド  
(愛称:未来のゆめ)

Chugin Asset Management

追加型投信／国内／株式



## ポートフォリオの業種別構成



※参考指数は、TOPIXです。TOPIXに関する著作権等の知的財産その他一切の権利は、東京証券取引所に帰属します。

※「業種別構成比」は、マザーファンドの状況です。「業種別構成比」はマザーファンドにおける組入株式の評価額の合計をそれぞれ100%として計算したものです。

※上記グラフは、ファンドが保有している株式の業種別比率とTOPIXの業種別比率を比較したものであり、当ファンドがどの業種の比重を高めているかを知らせるためのものです。

## ファンドマネージャーの見方

2018年3月の国内株式市場は、値幅の大きいもみあいの展開を予想します。2月は米国の長期金利の上昇に端を発した世界的な株式市場の調整が生じました。米国の長期金利の上昇は、1月のFOMC(米連邦公開市場委員会)のスタンスが想定以上にタカ派であったことが主因と考えられ、3月のFOMCで利上げ見通しが上方修正されるなどした場合は一段の上昇も想定されます。この場合、株式市場のバリュエーション調整により値動きが大きくなる可能性があります。また、3月はメジャーSQの月であることも、株式市場の変動を大きくする可能性があります。したがって、3月の国内株式市場は値幅が大きく、方向感を見極めづらい展開を予想します。中長期的な視点から見ると、2017年度の企業業績(経常利益ベース)は2016年度水準から約10%程度の増益見通しで、2013年度から続いた企業業績の伸びは継続すると考えています。また、現状の利益水準に甘んじることなく、将来の利益獲得に向け設備投資等の先行投資により積極的にリスクを取っている企業を評価したいと考えています。今期の増益水準と、この先行投資が将来的に利益として還流する見込みであることを考慮すると、現状は国内株式ポジション形成の好機であると考えます。

## 運用状況

当ファンドの2月の運用結果は対TOPIX設定来で+0.0%とほぼ同水準、2月単月で▲0.9%のアンダーパフォームとなりました。

富士通、SMCなどのパフォーマンスがマイナス寄りました。

売買においては、2017年度決算見通しを反映したバリュエーション数値(目標株価数値)、企業取材・説明会などによる情報収集を基に一部銘柄の入れ替え売買を実施しました。

具体的には、半導体関連のウェイトを減少させるべく東京エレクトロンを一部売却。購入では、取材・説明会等の情報収集より三井化学を追加購入しました。

## 今後の運用方針 (以下の内容は当資料作成日時点のものであり、予告なく変更する場合があります。)

2017年度決算着地および2018年度決算見通しを反映したバリュエーション数値(目標株価数値)、企業取材などによる情報収集を踏まえ、個別銘柄の入れ替え売買を実施します。

今後の企業業績は各企業における製品戦略・市場戦略などが業績および株価パフォーマンスに顕著に反映されることが考えられます。よって、従来以上に企業取材などの情報収集活動を積極的に行い、パフォーマンス向上につなげたいと考えております。

また、当ファンドが主要投資対象とするマザーファンドは、TOPIXなどの指数に対し、海外売上高比率の高い銘柄にウェイトを置いています。理由としては①国内企業の競争力および収益の源泉は依然として大部分が輸出であること、②国内株式市場は輸出関連企業が牽引して上昇すると考えていること、③一時的な円高局面は想定されますが、中長期的な為替市場の動向に加え、政策など輸出関連企業にとってフォローな環境が続くと予想されること、などがあげられます。したがって、引続き海外売上高比率の高い銘柄にウェイトを置いたポートフォリオを継続する方針です。

※最終ページの「当資料のご利用にあたっての注意事項等」を必ずご確認ください。  中銀アセットマネジメント

- MONTHLY REPORT -

ちゅうぎん日本大型株アクティブファンド  
(愛称:未来のゆめ)

Chugin Asset Management

追加型投信/国内/株式

## 株式組入上位10銘柄(2018年2月28日現在)

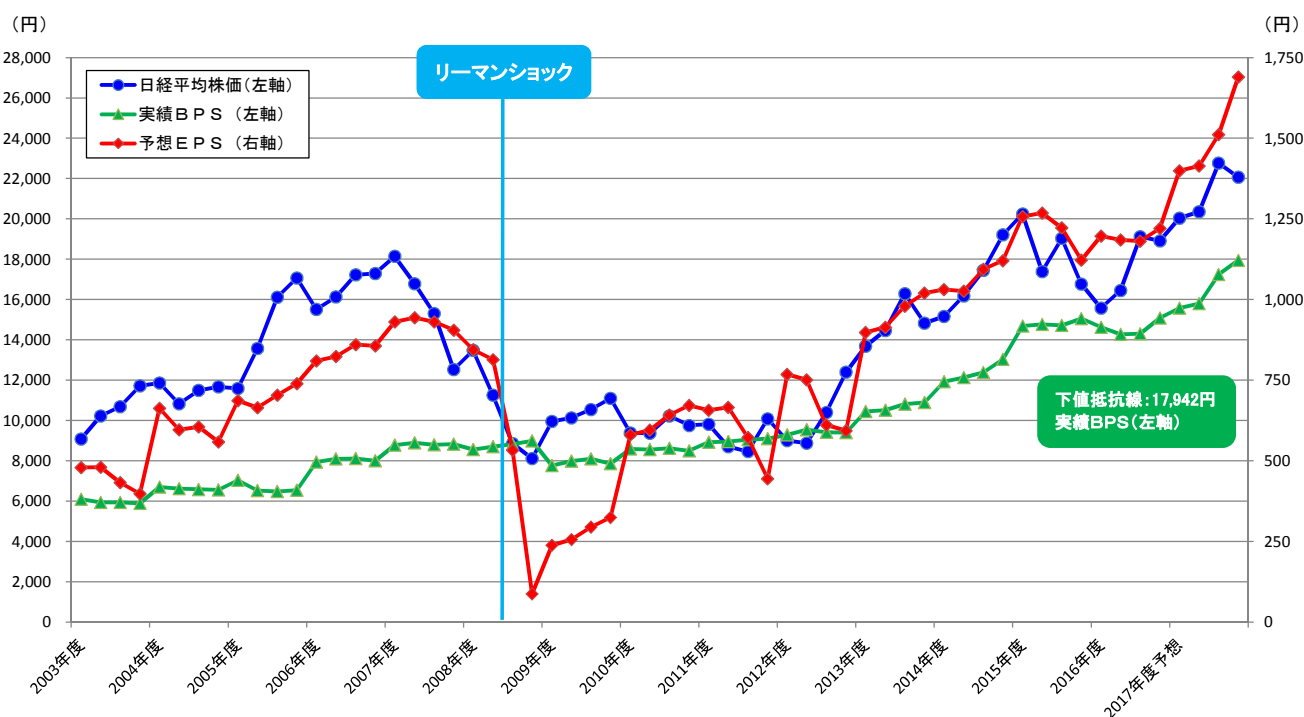
1	<b>日本電産</b>	精密小型モータで世界首位、小型から大型までの各種モータ、さらには機器装置や電子光学部品等を製造。同社が製造する部品は、スマートフォン等IT機器や家電、自動ドアなど業務用機器、自動車など身の回りのあらゆるものに使用されている。産業用ではロボティクス分野においてモータ主体にビジネスチャンスが拡大中。
	銘柄コード: 6594	
	業種: 電気機器	
2	<b>ダイキン工業</b>	エアコン世界首位、国内は業務用で圧倒的シェア。主力の空調事業は国内外で着実に推移し、特に中国で強さを発揮している。また、中間層の拡大に伴い需要が拡大するアジアや、好調な北米での成長力に期待。冷房専用インバーター機等の新製品投入や差別化戦略による売上高成長力が最大の強み。
	銘柄コード: 6367	
	業種: 機械	
3	<b>ヤマハ発動機</b>	楽器のヤマハから発祥し自動二輪で独立、世界大手。エンジン技術等を活用した多角化で、ボート事業で国内シェア1位、船外機・ウォータービーグル事業で世界シェア1位。自動二輪ではアセアン等優先市場を見極め、地域に合わせて商品を最適化したグローバルモデルの拡大に期待。
	銘柄コード: 7272	
	業種: 輸送用機器	
4	<b>スズキ</b>	国内軽自動車2強の1つで、小型車開発に優位性。国内軽自動車市場の底打ちに加え、「スイフト」や「ソリオ」などのコンパクトカーが新車効果で販売好調。2017年3月期は、減収増益、売上高は5期ぶり減収も、利益は過去最高益、配当も7期連続で増配。四輪車は世界生産・販売ともに過去最高を更新、特にインド、欧州が好調。
	銘柄コード: 7269	
	業種: 輸送用機器	
5	<b>リクルートホールディングス</b>	大学生向け求人広告事業から創業。「Hotpepper」「suumo」などの販促募集、「リクナビ」などの人材募集、「リクルートスタッフィング」などの人材派遣の3つの主力事業で国内No.1のプレゼンスを獲得。M&Aに積極的に取り組み、海外人材募集への注力によりグローバルでの事業ポートフォリオの拡大を実現。
	銘柄コード: 6098	
	業種: サービス業	
6	<b>村田製作所</b>	材料技術、前工程技術、商品設計技術、後工程技術、分析・評価技術などの基盤技術を独自に開発・蓄積。積層セラミックコンデンサや、SAW(弾性表面波)のRF(無線周波数)コンポーネントなど高付加価値製品では圧倒的な強みを持つ。セラミックコンデンサでは世界首位。
	銘柄コード: 6981	
	業種: 電気機器	
7	<b>ローム</b>	電子部品の大手でカスタムLSI(集積回路)に強み。ローム(ROHM)の社名は、創業当時の生産品目である抵抗器(Resistor)の頭文字「R」に抵抗値の単位Ω「ohm」を組み合わせたもの。主力のLSI事業は自動車の電装化が追い風、産業機器向けも好調。半導体素子事業はスマホ向けトランジスタなどが伸びる。
	銘柄コード: 6963	
	業種: 電気機器	
8	<b>三菱ケミカルホールディングス</b>	総合化学首位。三菱化学(総合化学メーカー)、三菱樹脂(樹脂加工メーカー)、三菱レイヨン(総合高分子化学メーカー)の3社を2017年4月に統合し、三菱ケミカルとしてグループの中核企業に位置付け。アクリル樹脂の原料となるMMA(メタクリル酸メチル)では、原料の異なる主要3製法を保有し、世界トップシェアを占める。
	銘柄コード: 4188	
	業種: 化学	
9	<b>TDK</b>	磁気を応用した電子材料をはじめ、多岐にわたる電子部品を手掛ける。素材、プロセス、評価、生産、デバイス・モジュール技術という5つの基盤技術を基にした製造工程が特長。磁性材料であるフェライトの工業生産を世界に先駆けて実施するなど技術力が高い。
	銘柄コード: 6762	
	業種: 電気機器	
10	<b>シスメックス</b>	検体検査機器の大手。血液成分測定装置で世界シェアトップ。血液検査、免疫血清検査、尿検査、生化学検査等に必要機器・試薬や、これらに関連するソフトウェアなどの研究開発から製造・販売・サポート&サービスまでを手がける。世界190カ国以上の顧客に、検査機器や各種検査に必要な試薬を幅広く提供。
	銘柄コード: 6869	
	業種: 電気機器	

※最終ページの「当資料のご利用にあたっての注意事項等」を必ずご確認ください。

中銀アセットマネジメント



## 株価(日経平均株価)と予想EPS、実績BPSの推移



## ◆ 株価(日経平均)と予想EPS(1株当たり利益)の関連性

上記グラフの通り、予想EPSと株価の方向性には連動性があると考えられます。2008年のリーマンショック前後で見ると、2008年のリーマンショック前までは予想EPSの上昇トレンドに対して、株価も上昇しています。一方、リーマンショック以降は、予想EPSの下落を織り込む形で株価が先に下落に転じています。また、予想EPSの下落トレンドに対して、株価も下落していることが分かります。

## ◆ 株価(日経平均)と予想EPS(1株当たり利益)の現状分析

リーマンショック以降、予想EPSは2009年1-3月期に底打ちし、回復傾向が継続しています。現状では2017年度予想ベースで、予想EPSは1,690円程度の見込みです。今後、為替相場の円高修正やアベノミスの進展、企業業績回復などにより予想EPSが増加すれば日本株式市場は魅力的と考えます。

## ◆ 株価(日経平均)と実績BPS(1株当たり純資産)の関連性

上記グラフの通り、実績BPSは株価の下支え(下値抵抗線)であると考えられます。リーマンショック後の2009年頃で見ると、予想EPSの線は実績BPSの線を下回って推移していますが、株価は8,000円近辺で下げ止まっています。同時期の実績BPSも約8,000円ですので、実績BPSの水準で株価は下げ止まったと考えられます。

## ◆ 株価(日経平均)と実績BPS(1株当たり純資産)の現状分析

会社は儲けた利益から、投資家に支払う配当部分を除き、残りの利益部分を「内部留保」という名前で「純資産」に貯めこみます。つまり、実績BPS(1株当たり「純資産」)は会社が利益を貯めることで、毎年少しずつ上昇していきます。リーマンショック以降、利益を「純資産」に貯めていくことで、実績BPSの水準は約8,000円から約18,000円まで上昇してきました。下支え(下値抵抗線)である実績BPSが約18,000円まで上昇したことで、株価の大幅な下落リスクは、以前に比べ軽減されていると考えられます。

## EPSとは

EPS(Earnings Per Share : 1株当たり利益)とは、その会社が1年間に上げることができた利益(当期純利益)を、その企業が発行している発行済株式総数で割ったものです。つまり、1株当たりの利益の金額を示す指標です。多くの株価分析で用いられる概念です。  
EPSの計算式・・・EPS=当期純利益÷発行済株式総数

## 予想EPSとは

上記、EPSの計算では、企業が発表する予想当期利益に基づいた予想EPSを利用しています。理由としては、株価は先行きの業績予想に基づき変動する(「株価が業績を織り込む」といいます)場合が多いことから、より正確な株式市場の方向性を予想するため、予想EPSを利用しています。

## BPSとは

BPS(Book-value Per Share : 1株当たり純資産)とは？  
会社の保有する「全資産」から借入金などの「負債」を除いた部分を「純資産」と言います。「純資産」をわかりやすく説明しますと、会社が稼いだ利益のなどが会社内に貯めこまれる「金庫」のイメージが近いかもしれません。  
その「純資産」を、その会社が発行している発行済株式総数で割ったものがBPSで、1株当たりの「純資産」の金額を示す指標です。企業の1株当たりの解散価値を表します。

BPSの計算式・・・BPS=純資産÷発行済株式総数

※1 「日経平均」は、株式会社日本経済新聞社によって独自に開発された手法によって、算出される著作物であり、株式会社日本経済新聞社は「日経平均」自体および「日経平均」を算定する手法に対して、著作権その他一切の知的財産権を有しています。  
※2 「日経」および「日経平均」を示す標準に関する商標権その他の知的財産権は、全て株式会社日本経済新聞社に帰属しています。  
※3 本件投資信託は、投資信託委託業者等の責任のもとで運用されるものであり、株式会社日本経済新聞社は、その運用および本件受益権の取引に関して、一切の責任を負いません。  
※4 株式会社日本経済新聞社は、「日経平均」を継続的に公表する義務を負うものではなく、公表の誤謬、遅延又は中断に関して、責任を負いません。  
※5 株式会社日本経済新聞社は、「日経平均」の構成銘柄、計算方法、その他「日経平均」の内容を変える権利および公表を停止する権利を有しています。



## - MONTHLY REPORT -

ちゅうぎん日本大型株アクティブファンド  
(愛称：未来のゆめ)

Chugin Asset Management

追加型投信／国内／株式

## ファンドの目的・特色 (くわしくは投資信託説明書(交付目論見書)を必ずご覧ください)

## ◆ファンドの目的

ファミリーファンド方式により、信託財産の成長を図ることを目的として積極的な運用を行います。

## ◆ファンドの特色

①ちゅうぎんターゲット型日本株マザーファンドを主要投資対象とし、信託財産の成長を図ることを目的として積極的な運用を行います。

＜ちゅうぎんターゲット型日本株マザーファンドの運用方針＞

・TOPIX採用銘柄で時価総額上位200銘柄の内、当社独自のバリュエーションに基づき割高と判断された銘柄を除いた銘柄の中から投資銘柄を選定します。また、各銘柄毎のファンダメンタルズ分析および流動性等を考慮して、各銘柄の組入比率を決定します。

・株式の組入比率は通常の状態でも高位に維持することを基本とします。

・ポートフォリオ構築にあたっては、分散投資を基本としリスク分散を図ります。

・運用の効率化を図るため、ヘッジ目的で有価証券先物取引等を利用します。

・資金動向や市況動向等によっては、上記のような運用が行われない場合があります。

②株式以外の資産への実質投資割合は原則信託財産総額の50%以下とします。

③いつでも売買が可能です。

・お申込みの受付は、原則として販売会社の毎営業日、午後3時までといたします。受付時間を過ぎてのお申込みは、翌営業日のお取扱いとなりますのでご注意ください。

※信託財産の資金管理を円滑に行うため、大口の換金請求に制限を設ける場合があります。

## 投資リスク (くわしくは投資信託説明書(交付目論見書)を必ずご覧ください)

## ◆基準価額変動要因

当ファンドは、国内の株式等値動きのある有価証券等に投資しますので、組入れた有価証券等の価格の下落等の影響により、基準価額が下落し、損失を被り、投資元本を割り込むことがあります。したがって、投資者の皆さまの投資元本は保証されているものではありません。

投資信託は預貯金と異なります。投資信託財産に生じた利益および損失は、すべて投資者の皆さまに帰属します。

## ■株価変動リスク

株式の価格は、株式の発行会社の業績や財務状況、株式市場の需給、政治・経済情勢等の影響により変動します。

投資した株式の価格の上昇は、当ファンドの基準価額の上昇要因となり、投資した株式の価格の下落は、当ファンドの基準価額の下落要因となります。

## ■流動性リスク

株式市場における売買量の欠如等の理由により、当ファンドにとって最適な時期で株式の売買ができず機会損失を被る可能性があります。

## ■信用リスク

有価証券の発行体の破綻や財務状況の悪化、および有価証券の発行体の財務状況に関する外部評価の変化等の影響により、投資した有価証券の価格が大きく下落することや、投資資金が回収不能となる場合があります。

## ◆その他の留意点

当ファンドのお取引に関しては、金融商品取引法第37条の6の規定(いわゆるクーリング・オフ)の適用はありません。

## ◆リスクの管理体制

委託会社では、リスク管理規程において運用に関するリスク管理方針を定め、運用部から独立した部署が、運用の指図について運用の基本方針や法令諸規則等に照らして適切かどうかのモニタリング・検証を通じて、運用リスクの管理を行っております。

## 委託会社、その他関係法人

◆委託会社：中銀アセットマネジメント株式会社(金融商品取引業者 中国財務局長(金商)第10号)

一般社団法人投資信託協会／一般社団法人日本投資顧問業協会 会員

信託財産の運用指図、目論見書および運用報告書の作成等を行います。

◆受託会社：三菱UFJ信託銀行株式会社(再信託受託会社：日本マスタートラスト信託銀行株式会社)

追加信託に係る振替機関への通知等、信託財産の保管・管理・計算等を行います。

◆販売会社：株式会社中国銀行(登録金融機関 中国財務局長(登金)第2号)

日本証券業協会／一般社団法人金融先物取引業協会 会員

中銀証券株式会社(金融商品取引業者 中国財務局長(金商)第6号)

日本証券業協会 会員

ファンドの募集の取扱い・販売、目論見書・運用報告書の交付、一部解約の請求の受付、収益分配金、償還金および一部解約金の支払い等を行います。

※最終ページの「当資料のご利用にあたっての注意事項等」を必ずご確認ください。  中銀アセットマネジメント

